

名誉顧問のコモンセンス

二律背反 表裏論 1

天道か、人道か？



二律背反と解決先生

世の中は、争いで出来ています。必ず、二つの相対する力が働き、せめぎ合って世の中が進んでいきます。「生きる」に対しては、「死」が力を発揮します。「健康」に対しては「病氣」が邪魔をします。「幸せ」に対しては「不幸」が、「平和」に対しては「戦争」が……。なにかしようとする、突然、反対する力が現れて相い対します。これを、「二律背反」といいます。この「二律背反」(にりつはいはん:独: Antinomie)とは、お互いに矛盾するもの同士が両立し合って、どちらも正しく、どちらも存在価値があるので、どちらか一方に決めにくいことをいいます。

デカップリングの名手 貧困な農村を救おうとしている報徳先生は、「二律背反先生」といってもいいほど、解決不可能な矛盾をはらんだ難しい事件に堪えず遭遇します。でも、どんな矛盾に満ちた難問・課題でも、見事に解いて見せます。まさに、「二律背反解決先生」と言って良いほどです。いまの時代の言葉で言うと、「デカップリング」(decoupling:引き離す)の名手です。「デ: de-」という英語の接頭辞は、①下降: decend。②分離: decline。③否定: demerit。④強意: declare。⑤悪化・非難: devalue などに使われます。[decoupling] の [de-] は「分離: 引き離す」です。「デカップリング」は、

矛盾し合っているカップル同士を別々に引き離して、矛盾を解消し、ものごとを解決するのは。経済が発展して自動車が走り廻ると排気ガスが増えて地球の温暖化が促進され環境が悪くなります。自動車と廃棄ガスとは「カップル」です。経済発展を高める自動車の活動とますます増える大気の汚染は快適な生活作りに矛盾します。この二つの関係を引き離して、経済は経済で発展し、環境は環境で整備される — 両方が上手く行くようにするのが「デカップリング」です。環境経済学の登場です。ガソリン車から電気自動車への転換は、「デカップリング」の成功例です。ここでは、報徳先生の「天道と人道のデカップリング」や「藩と農村のデカップリング」や「善農民と惰農民のデカップリング」や「怨望と仁徳のデカップリング」など、その名手振りを見ていきます。

報徳仕法の解決法 報徳先生は、沢山の本を読んで、多くのことを考え、素晴らしい教えで人々を諭(さと)しました。その教えのほとんどは、漢籍の古典から学んだことでありますが、本だけからでは得られない先生独自の解釈が込められています。ここが凄いところです。世の中は、「右か左か」「正か邪か」「徳か損か」といった「二律背反」の事柄がばかりでできています。特に、江戸末期の農民の日々の生活は、「あれか、これか」といった「二律背反」の難題ばかりです。災難が、突然、眼前に現れます。直に対処法を決めて、直ぐに実践しなければなりません。それに、これは本を読んだだけでは解決出来ない具体的な問題ばかりです。でも先生は、現実主義者です。農政の仕事は、毎日、問題が発生し、それぞれにその問題に合った「仕法」(解決法)を施さなければなりません。それを先生は、独自の考え方で見事に解いて見せるのです。そして、その結果が、すべての人が幸せになるような「仁」をもたらすものなのです。

働く×勉強 「だれにも頼らず、自分一人だけで解決すること」 — これは、これまでに先生が直面した事態に対してたえず行ってきたことです。まず、若いとき、先生には自分の時間はありませんでした。常に働いていなければ食べていけないのです。だれも助けてくれません。仕方なく、終日、山に出ては薪を拾い、帰っては畑を耕し、夜は草鞋を編みました。瞬時として休む時がありません。でも、本を読んで学びたいのです。どうすれば良いのでしょうか? この「働く時間×勉強時間」の「こちらを取ればあちらが立たず」の若き金次郎「二律背反の難題」は、だれも助けてくれない非情な社会の中で生まれました。14歳で父親をなくし、田地・田畑・自宅までも洪水でなくし、16歳のときに母親も亡くし、幼い弟二人と全くの天涯孤独で無一文です。親類縁者も心から真剣に助けてはくれません。弟二人は母の実家が引き取ってくれ、金次郎自身は親戚筋の万兵衛が面倒をみてくれました。

「金次郎はひたすら万兵衛を頼りにし、ことに養育をうけているのですから、すべてに心をつくし、万兵衛の命することならどんなこともそむかず、毎日、少しの罷業(ひぎょう: わざと仕事を休む)もせず、誠実に手伝いをし、夜は夜ふけまで縄ないをし、雪・風・寒夜もいやがらずに万兵衛のために働きました。だんだんと月日がたつにつれて、金次郎が考えたのは、たとえ小百姓であっても、文字を書くことと算盤を使うことの心得がなくては自分の望みに反すると考えて、農事の夜なべを終えたあと、「勉強したい」と万兵衛に言いました。万兵衛は、『百姓は農業に精をだし、年貢諸役さえ納めれば何をしてもかまわない。夜なべを終えたあとに勉強したいということはやむをえないが、第一に明りがなくてはやれないだろう。油の出しようがないぞ』と答えました。仕方がないので、だんだん考えて、『万兵衛の世話にならぬよう油の調達を工夫をしたら、万兵衛もとやかく言うまいし、農業手伝の暇に、金次郎所有の荒地のうちに少しずつ菜種をまき、よく手入れをしたら収穫もあるだろう』と考えて、その年の秋に村内の懇意の者から菜種を五勺ほど貰い、荒れ地の内、堀の左右にまき付け、手入れをしたところ、相当に成長し、翌年の夏には菜種七升余がとれたので隣村の油屋嘉右衛門方へ持参し、『油とかえてほしい』と頼みました。油屋はすぐに承知し、『菜種一升について油二合の割合で渡す』というので必要のたびに渡してくれるように約束して油二合をうけとりました。

ともあれ万兵衛の意見を生かして自立自習の決意を固め、『小を積んで大をなすこと』をつかんだ端緒が夜学の燈油であったことに、少年としては稀な強烈な意志をみるのである。【町田時左衛門『二宮尊徳』11頁】

績小為大の実例：負薪読書

時間とお金のデカップリング 自立するために自習したいのに時間もお金もない — という「二律背反」に陥った報徳先生を助けたのが、この「小を積んで大をなす」と言う自ら産み出した手法です。これを、先生は、「**績小為大**」(せきしょうしだい)といいます。

「独立して家を再興するために学を志したことが『自立・自習』の目を開かせ、その費用を捻出する為に、だれも手につけない荒地(免税地)を使うことを思いついたことは、独立を望む少年の知恵であった。年貢のかからない方法で、小を積んで大をなす、現実的な蓄積の道を金次郎は歩み出した」。

元手がある 二宮の本家は寛政九年(1797)絶家となり、また母方の実家も、享和二年(1802)祖父太兵衛の死去で衰運に向かい、自家の復興は金次郎の肩にかかっています。金次郎は、自分の家ばかりではなく、本家も母の実家も、同じように衰運に見舞われた実情をつぶさに体験しました。金次郎が困窮のなかにつけて身につけたものは、どんな事業にも元手があるということであり、その元手を得るには一攫千金的なことでは駄目で、少しずつ積んでいくという道でした。「**績小為大**」ということが金次郎の終世の人生観となったのです。

負薪読書像の建設 本を読む時間がなければ、薪を背負いながら、歩きながら、本を読めば良いのです。「僅かな時間でも読書に当てよう」 — これこそ、「績小為大」です。それで、金次郎は、毎日、薪を背負って歩きながら本を読むことにしたのです。これこそ、二律背反の見事な解決策です。この **労働時間の二律背反を解決する「負薪読書」**(ふしんどくしょ:薪を負って書を読む)の金次郎スタイルが世界で初めて生まれたのです。それで、この金次郎の智恵を讃えて、日本の津々浦々の小学校の校庭に金次郎の負薪読書像が建てられたのです。

それで金次郎が、毎日、歩きながら読んだ中国の古典が、生涯、役に立ちました。中国の儒教の本に書かれていたことが「報徳仕法」に示唆を与えてくれました。でも、そこで解かれているのは、例えば、「仁」です。本には、「答は『仁』に従え」となっています。でも、現実問題では、「仁」はどこにあるかが問題です。

一人前の農民 文化元年(1804)、金次郎は、万兵衛宅を出て村内の名主岡部家に奉公し、やがて文化三年三月には生家に帰り、亡父利右衛門が質に入れた下品九畝十歩を三両で受け出しています。この年から金銭出納帳をつけ始めましたが、翌文化四年には、作徳米十三俵・貸付米七俵・賃金三分とあり、五年には貸付の米金がふえ、賃金も三両二分二百文とふえています。米金を貸し付けて利息を得ることは金次郎の重要な理財法でした。これ以後、余裕があれば田畑を買い入れ、文化七年からは、田畑の大部分を小作に出し、手もとにはわずかの自作地を残すだけとなりました。すでに一人前の農民に成長していたのです。

農民を苦しめる二つの敵：自然災害と支配者たちによる悪政

農ではなく農民 あるとき、先生は、領主さまからお役人の一人に取り立てられて、貧

困村の再建を依頼されました。「まず、守るべきものは領内の農民たちの命と生活だ」と思いました。「大事なものは、農ではなく農民だ」と悟りました。これが「仁」の考え方なのです。いつも、農民には、自分たちを苦しめる敵が二つあります — **「自然に依る災害と支配者たちによる悪政」**です。この二つが、農民たちを苦しめています。まず、報徳先生は、この二つの敵から農民たちを守り、救ってやらなければなりません。「自然と農業のデカップリング」と「藩と農村のデカップリング」の両方を可能にすることです。

「天道」としての自然

天の勤めと人間の勤め まず、相手は「自然」です。自然は、人間にとって脅威であり敵です。人間である農民の勤めは、まず、農作業に勤(つとめ)ることです。もし、この人間の勤めを怠れば、自然は自然で、己の務めに励み、雑草を生やし、堤を崩し、掘りを土砂で埋め、橋を壊します。このように、自然の働きに対して、日々、尽力を尽くしてその働きを抑えなければ人は生きていけません。日本にいる農民たちは、ルソーのいう「自然に帰れ」とは全く逆の立場にいます。でも、その一方で、稲を実らせ、野菜を育て、水を施し、木々を実らせてくれるのも「自然」です。「自然」の恩恵を受けなければ暮らしてはいけません。さあ、困りました。これこそ、「二律背反」です。

また先生は、ほかの箇所でも次のようにいいます —

「夫れ、萬物、自然の時あり。其の時にあらざれば其の事を為すあたわず。百穀の生々を欲すといへども春陽至らざれば蒔くことあたはず。若し、寒中之を蒔く時は勞して益なし。豈、益無きのみならん。却ってその種をうしなへり」。

【『報徳記』84頁】

農民が先ず従うのは、季節の働きです。春に苗を植えタネを蒔くと、あとは「自然」が勝手に苗をコメに、種を野菜にしてくれます。秋になって、収穫すればいいのです。自然は人間にとって、最も頼りになる援助者であり、相棒です。自然あつての農民です。

「作る」は使わない 西洋史学者の会田雄次さんは、ヨーロッパを例にとって、次のように「天道と人道」について、報徳先生と同じことを言っています —

「ヨーロッパでは、穀物や果物を『つくる』とき、つくる[英語では make]という言葉は使わない。植物は自然の力によって生え、花を咲かせ、実を結ぶのだ。人はそれを助けるにすぎぬ。だから、耕す、栽培する、育生する、収穫するといい、米づくりなどとはいわないのだ。これは別に農業を蔑視してのことではない。つくるということの意味をきびしく見るからである」。

【『リーダーの条件』202頁】

自然の善と悪 この自然と人間との関係は複雑で、自然は人間にとって良いことばかりではありません。尊徳先生は、この自然と人間との関係について独特の考えをもっていました。「自然は常に善なるものではない。悪にも変わる」といいます。自然は、時には、農民の働きの邪魔ばかりします。日々、暑かったり寒かったり、雨が多かったり日照りがつづいたり、水が涸れたり川が氾濫したり、稲が枯れたり雑草が広がったりで、その間、農民は、水路を引いて水を田に流したり、雑草を刈ったり、肥料を撒いたりしなければなりません。とはいえ、人間は自然の恩寵によって生きています。春に苗を植えれば、秋にはコメができます。山からの水は田の苗を育ててくれます。また、柿の木や蜜柑の木に勝手に果実を実(みの)らせてくれます。ここでも、自然と人間のデカップリングが必要です。

自然に対する挑戦 こう見てくると、農民にとって、自然から「施し」(ほどこし)としての「恵み」(めぐみ)は、まず常に、天からくるのです。すなわち、「天道」です。むろん儒

教では、「聖賢の道は天の道」であり、決して揺るがすことはできません。でも、先生は違います。「天理は永遠に変化はないが、人の道は一日怠ればたちまち廢(はい:すたれる)する」というのです。天理を厳格に守れば、「人道」は廢(すた)ります。人間は、常に自然に対して挑戦をつづけなければ作物は獲れません。「恩人である自然に対する挑戦」——先生は、それを言っているのです。むろん、この場合の挑戦とは、農作業や開墾や川や道路の普請や村民同士のお互いの協力に勤(いそ)しむことです。それで先生は、「自然の働き」と「人間の働き」をそれぞれ「天道」と「人道」として分けたのです。この天道に対して、「ときには、人道は自然を裏切って、堂々と自然を改造して、自分たちの為に自由にやっいていい」と言う例をあげてみせます。この例も巧みで分かり易く、なかなか面白いことをいう先生です。

世の中で、用に立つ材木はみな四角である。しかし、天は人のために四角の木を生じないからこの国の山林にも四角な木はない。また皮もなく骨もなく、かまぼこやはんぺんのような魚があれば人のためには便利であるが、天はこれを生じないから、漫々たる大海にそのような魚は一尾もない。また粳(もみ)もなく糠(ぬか)もなく、白米のような米があれば人世にはこのうえもない利益であるが、天はこれを生じない。それゆえ全国の田地に一粒もこういう米はない。これで、天道と人道とが異なる道理を悟ることができよう。また南瓜を植えれば必ず蔓(つる)があり、米を作れば必ず藁(わら)がある。これまた自然の理である。糠と米とは一身同体である。肉と骨もまた同じだ。肉の多い魚は骨も大きい。それを糠と骨とを嫌い、米と肉とを欲するのは人の私心であるから、天に対しては申し訳なからう。そうはいっても、今まで喰っていた飯も鯁(えび)れば喰うことが出来ない人体だから仕方がない。よくよくこの理屈をわきまえなければならない。

【『二宮翁夜話』百十五編109頁】

天理にも欲あり これは当然のことですが、「自然には、人間に役に立つ四角の杉の木とか、骨のない鯛とかは元々ない」という先生の話の着想はユニークです。さて、ところで、この対立し挑戦し合う「天道と人道」の二つの矛盾する原理の対立を「デカップリング」(解決)することは可能なのでしょうか？ 報徳先生は、次のようにいいます。

「天理と人道との差別をよく区別できる人は少ない。人身があれば、[その一方で、自然は、自らの働きで世界を支配しようとする] 欲があるのは天理である。田畑に草の生ずるのと同じである。堤は崩れ、堀は埋まり、橋は朽ちる。これが天理である。ところが、人道は、私欲を制するのを道とし、田畑の草を取るのを道とし、堤は築き、堀はさらい、橋はかけ替えるのを道とする」。

【『二宮翁夜話』6頁】

人間が働くと言うこと 自然は人間に多大な恩恵を与えてくれるものの、人間は自然に逆らっていかなければ生きていけません。ある意味で、自然は人間のためにならないのです。人間が働かなければならないのはそのためです。そのことを、多くの人は知っていて知りません。

「[天理が支配する]世界は巡りめぐって止むことがない。寒さが去れば暑さが来る。夜が明ければ昼となり、昼になればまた夜となり、また万物生ずれば滅び、滅びればまた生ずる。たとえば金をやれば品物が来、品物をやれば金が来るのと同じである。寝ても醒めても、居ても歩いて、昨日は今日になり、今日は明日となる。田畑も海山もみなそのとおり、ここで薪をたき減らす分は山林で生木し、ここで食い減らすだけの穀物は田畑で生育する。野菜でも魚類でも、世の中で減るだけは田畑・河海・山林で生育し、生まれた子は時々刻々に年をとり、築いた堤は時々刻々に崩れ、掘った堀は日々夜々に埋まり、葺いた屋根は日々夜々に腐る。これが天理の常である」。

【『二宮翁夜話』3頁】

自然はやり過ぎる 自然は人間に対して大きな恩恵をもたらしてくれます。でも、「善・悪」だけで考えると、やり過ぎの感があります。それで、この自然の行いに関して、人間は異議を唱えなければならないときがあります。自然のままにしておいたら、夏の暑さでは熱中症に罹（か）かって死んでしまい、冬には凍えて死んでしまいます。それが、天の道・天理でもあるのです。それでは、人間として生きていけません。それで、当然、人間は人間で、天道とは違った働きをしなければならないときがあります。反天理主義の決行です。人間の天への反逆です。

「しかし、人道はこれとは異なる。なぜならば、風雨に定めがなく寒暑が往来するこの世界に、羽毛もなく、鱗（うろこ）や殻（から）もなく、はだかで生まれてきた人間は、家がなければ雨露をしのぐことができず、衣服がなければ寒暑をしのげない。そこで、人道というものを立てて、米を善とし、莠（はくさ：水田に生える雑草）を悪とし、家を造るのを善とし、こわすのを悪とする。これはみな人のために立てた道である。それゆえ人道というのである。**天理からみれば、これらにも善悪はない。**その証拠には、天理に任せておけばみな荒地になって、開園の昔に帰る。なぜなら、それが天理・自然の道だからである。天には善悪はないから、稲と莠の区別をしない。種のあるものはみな生育させ、生氣のあるものはみな発生させる。人道はその天理に従うけれども、そのうちにそれぞれ区別をし、稗（ひえ）や莠は悪とし米や麦は善とするように、**みな人身に便利なものを善とし不便なものを悪とする。**そこに天理と異なるところがある。なぜならば、人道は人が立てたものだからである」【同】

非常によく分かる説明です。ここで出た先生の結論は、「やり過ぎの自然から人間が身を守る為には、反抗してもいい。反抗とは、**一生懸命に働く** ということだ」でした。勤農・勤労の勤めです。

「このように、天理と人道とはまったく別のものだから、天理は永遠に変化なく、[しかし]人道は一日怠ればたちまち廃れる。だから、**人道は勤（つと）めるのを尊しとし、自然に任せるのを尊ばない。**人道の勤めるべきは、**己に克（か）つ** という教えである。己というのは私欲である。私欲は田畑にたとえれば草である。克つというのは、この田畑に生ずる草を取り捨てることだ。己に克つというのは、わが心の田畑に生ずる草をけずり取り、取り捨てて、**[人道とは] わが心の米麦を繁茂させる勤めのこと** だ。これを人道という。『論語』（顔淵篇）に、『己に克（か）って礼に復（もど）る』（勤め働くことで自分の環境にうちかかって礼の規則にたち帰る）とあるのは、この勤めのことだ」 【『二宮翁夜話』6頁】

人道的に勤める さすが報徳先生で、「人道は勤めるのを尊しとし、自然に任せるのを尊ばない」と断言します。これが、農民たちに対する先生の「仕法＝やり方」です。「人道は、自分の心に従って、自然が育てる『莠』（雑草）ではなく、人間の役に立つ『米麦』を繁茂させるのが人間の勤めの本位なのだ」というのです。人道は、その人間の怠惰な私欲を抑え、欲望を制し、勤め勤めてなるものです。なにもしないではほかっておいては、自然環境は悪くなるばかりで、人間は生きていけません。ときには、大胆に天理の働きに逆らい、人道によって、人道の為に、天道である「自然」を変えてもいいのです。人道は、人が苦勞して、勤勞して、作り出すものです。でもそれは、天道を絶対とする儒教の精神に反します。しかし、『論語』でも、「**己に克って礼に復る**」（人道に勝って天道にかえる）と言っているのです。そのために、「人間は、自ら、道德律を定め、法律を作り、礼法を守り、教育をほどこして、初めて人道を行うのだ。これが儒教の本意である」と先生は解釈するのです。なるほど。先生は、「論語読みの論語知らず」ではありません。論語の言葉を逆手にとって、自分の都合の良いように解釈するのです。

怒ってばかりいる報徳先生 そこで大事ななのは、「己に克つ」です。自分の欲望やわが

ままで自分勝手にしたいことをするのはありません。人道は人間が考えて行う作為によるものです。そのため、常に人格形成が先になります。教育やお説法や叱咤激励が必要です。先生が絶えず怒っているのはそのためです。己の欲望を抑えて、己に克って、自分よりも他人を先ず先にする「仁の精神」でもって、世のため、人のために尽くす — こうして先生は人道を優先して、「天道か、人道か」の二律背反を克服したのです。「歩きながら、本を読め」の精神と同じです。勤労と勤勉の両方を同時に行わなければなりません。デカップリングです。頭の良い先生は、いつもそれを可能にします。二律背反解決の天才であり、デカップリングの名手です。

天道 対 人道

また、先生は、「天道と人道の二律背反」について、別のところで、「天道を恨んではいけない」と次のように言ってます。

翁はこう言われた — 「天道は自然である。人道は天道に従うけれども、また人為である。人道を尽して天道に任(まか)すべきである。人為をゆるがせにして天道を恨んではならない。庭前の落葉は天道である。無心に日夜積もる。これを払わないのは人道ではない。」
【『二宮翁夜話』167頁】

落ち葉は天道 「人間は自然に従え」という。この大きな自然には到底小さな人間は逆らえない。この場合、人道を尽して天道に任すべきで、「だから、逆らわず、木が落ち葉を散らしたらそれを掃きなさい」という。これが人為であり、人間の務めだという。だが、先生はこれで終わりません。そのあとがまた凄い。

「落ち葉は、払えばまた落ちる。それに心を煩わし心を労し、一葉が落ちれば、箒(ほうき)を取って立つなどは、塵芥(ちりあか)のために使い立てられるというもので、愚かなことだ。木の葉の落ちるのは天道である。人道をもって毎朝一度は払うがよい。しかしまた落ちて捨て置いて、**無心の落葉に使い立てられてはいけない**。また人道をゆるがせにして、積もり放題にしてはならない。これが人道である」。

天が落とす落ち葉は掃かなければならないが、だからといって、「しょっちゅう、箒をもって掃除ばかりしてはいけない」と先生はいうのです。先生は口癖に、「薪を懷いて火に向かうの愚」と言います。ここからが、『四書五経』には書いてないことです。「木の葉が落ちるのは天道であるが、一度は払ってもいいが、時には捨ておきなさい」と人道に助言します。さらに、「落ち葉に使い立てられてはいけないが、積もり放題にしてもいい」ともいいます。さあ、どうすればいいのでしょうか。ここからが、二律背反解決主義者・報徳先生の出番であります。

「変通」という裏技(うらわざ)

ここで、落ち葉から人間の話になります。ここがまた、凄い。

愚人であろうと、悪人であろうと、**よく教えるがよい**。教えて聞かなくても、それに心を労してはならない。聞かないからといって捨てることなく、**何度でも教えるがよい**。

落ち葉のような人間もいます。何度、掃いてもまた墮落して落ちてくるのです。「相手が間違っていたらあまり気にせず、一度はあきらめて、何度でも教えろ」という。ここが、「絶対善」を説く『四書五経』にはないところです。これを先生は、「**変通**」(へんつう)とか「**権道**」(けんどう)といいます。「**裏技**」のことです。誠の「仁の心」に長(た)けた報徳先生、独自の解釈です。凄いです。まだ、先生のご温情はつづきます。

「教えてもそのとおりにしないからといって憤慨してはいけない。聞かないからといって捨ててしまうのは『不仁』である。教えてもそのとおりにしないからといって憤慨するのは『不智』である。不仁と不智とは徳者の恐れるところである。仁・智二つを心がけて、自分の徳を全うすべきだ」。

【『二宮翁夜話』167頁】

「庭の落ち葉を掃きなさい。ただ、いつまでも掃いてばかりいてはいけません。いつかは、天も落ち葉も冬になって落ちれば、もう落とさなくなります。それまで待ちなさい」というのです。なるほど、悠長なものです。でも、これが人道の「智恵」というものです。これが、「変通」です。愚人や悪人相手にして、待てないのは智恵がないからだ。これを、「不智」と言う。決して、怒ってはいけません。一知半解な人間共にとっては、ここまで言わないと真意が伝わりません。

「**不仁**」と「**不智**」とは徳者の恐れるところである。仁・智二つを心がけて、自分の徳を全うすべきだ。

「世の中、『仁の心』だけではいけません。『不仁の心』を知ることにも必要です。『智恵』も働かせて相手にあたりなさい。『不知の心』も知らなければなりません。人に対する時には諦めてはいけません」というのが「報徳仕法」です。「変通」です。なるほど、納得。実践的です。

縁なき衆生 でも、この一時的な放置となる「変通」は、ときどき他人の誤解をまねきます。相手に分からないようにこっそり行うのが「変通：裏技」ですから当然です。落ち葉を掃かずにいると、「庭が汚いではないか」「なんて無精なのだ」「自分の役目を果たしなさい」などと言われます。なんとも「縁なき衆生は度し難し」(えんなきしゅじょうはどしがたし:人の忠告を聞こうともしない者は救いようがない)です。そんなとき、無理解な相手を前に、じっと我慢です。先生は、いつも我慢しました。ここでの「縁なき衆生」とは怨望の持ち主たちのことです。結局は、その人たちも遂には先生が説得して言うことをきくようになりました。先生の論法はいつも、「足して二で割る」のではなく、「足して三にする」ものです。困っている人や悪に流れている人も、決して見捨てたりしません。

そんな報徳先生のお話はまだつづきます —

風紀改良方が政事の本意

翁はこう言われた — 「遊惰の風が深く染みこんだ村里を新しくするのは、まことにむづかしいものだ。なぜなら、①法で戒めることもできず、②命じても行なわれず、③教えも施(ほどこ)しようがない。これに、①精励を行なわせ、②義に向かわせるということは、まことに困難だ」。

【『二宮翁夜話』128頁】

村に蔓延(はびこ)る怠惰な風習は、表向きは注意しても、厳格な法律や命令で取り締まることは出来ません。そこで報徳先生は、相手の心の中にある「仁」に訴え、ない時には「仁」を説きます。

「私が昔、桜町の陣屋に行ったとき、配下の村々は、極度の悪習・弊風に染まって、どうすることもできなかった。そこで私は、深夜あるいは未明に、①村里を巡行した。②怠けているのを戒めるでもなく、③朝寝を叱るでもない。④善い悪いも問わず、⑤勤惰も言わず、ただ自分の勤めとして、⑥寒暑・風雨といっても怠らなかつた。二カ月すると、初めて足音を聞いて驚く者もあり、また足跡を見て怪しむ者もあり、また現に出会う者もあった。それから次第に、①戒心(かいしん:用心)を生じ、②畏心(いしん:うやまうころ)をいだき、数カ月すると、③夜遊び・④博突・⑤鬭争はもちろん、夫婦の間や奴僕の間にも、⑥叱ったり、⑦罵ったりする声を聞かなくなった」。

そこで、村長や役人たちに教えて諭します —

「諺に、『権平が種を蒔けば烏(からす)が掘る。三度に一度は追わずばなるまい』という。これは田舎のたわむれ言であるが、役職についている人も知らなくてはならない。烏が田圃を荒らすのは烏の罪ではない。田圃を守る者が追わない過ちだ。**政道を犯す者があるのも、官がこれを追わない過ちだ。**これを追う道も、権平が追うのを勤めとして、**捕えるのを目的としない**ようにありたいものだ。このたわむれ言は、政事の本意にかなっている。田舎の言葉とはいいいながら、心得なくてはならない」。

一件落着 これも良いお話です。ここで先生は、絶えず村を巡行するという「智」を使ったのです。でも、この「智」には、「仁の心」もありました。政道を犯す者たちを、口で叱ったり、捕らえたり、罰したりはしないのです。**ただ黙って村内を歩くだけ**です。それだけで、村人たちは自ら改心したのです。悪者を罰しないのは責任者の手抜きで、「変通」ですが、これが「仁の心」でもあるのです。一方で、こちらからは、「お前のことを見捨てていないぞ」という信号を絶えず送りつづけているのですから。でも、三度に一度は権兵衛になって、直接・注意することも忘れてはなりません。ここまで来て、初めて一件落着です。

人道と天理は別 翁はこう言われた — 「人道は人がつくったものである。だから自然に行なわれる天理とは別である。天理とは春には生じ秋には枯れ、火は乾いたものに燃えつき、水は低い所に流れる。昼夜動いて永遠に変わらないものである。人道は、日々・夜々、人力を尽し、保護して成り立つ。それゆえ、[人道を] 天道の自然に任せれば、たちまち廃れて行なわれなくなる」。

【『二宮翁夜話』4頁】

なるほど、よく分かりました。天は天で、米や麦や柿や瓜や豆を黙って恵んでくれます。人はただ、畑を耕してタネを蒔くだけでいいのです。でも、すべてが天のするままにしておくわけにはいきません。天も行き過ぎて、酷暑や寒冷をもたらし、豪雨や干害をもたらします。私たちは、どこまで天の仕業(しわざ)に従ってその通りに生き、どこから、天の挙動から離れて、人間としての独自の働きをすべきかに惑います。天が落ち葉を散らすからといって、始終、落ち葉ばかり掃いているわけにはいきません。でも、どこかで、落ち葉を取り除かなければならないのです。いつかは、畑に無性に生える雑草はその都度刈り取らねばなりません。この天とのお付き合いの兼ね合いが勝負です。

先生は、「天道と人道は対立するものではなく、天道のやり方がある。人道は天道のそのやり方を自分たちの良いように代えるのが勤めだ。それを怠ってはいけない。日々考えて、日々務めるのが人道だ」というのです。

他人に譲り将来に譲る 「だから人道が情欲のままにするときには成り立たないものだ。たとえば漫々たる海上には道がないようだが、船道を定め、それによらなければ岩にふれる。道路も同じこと、自分の思うままに行けば突きあたる。言語も同じ、思うままに言葉を出せば、たちまち争いを生ずる。そこで人道は、欲を抑え、情を制し、勤め勤めて成るものだ。うまい食事、美しい着物が欲しいのは天性の自然だ。これを抑え、それを忍んで家産の分内[収入]にしたがわせる。身体の安逸・奢侈を願うのもまた同じことだ。好きな酒をひかえ、安逸を戒め、欲しい美食・美服を抑え、分限[予算]の内からさらに節約し、余裕を生じ、それを他人に譲り、将来に譲るべきだ。**これを人道というのである。**」

人々が日々務めて利益を得たときには、欲を抑え、感情を抑えて、予算を立てて生活をするのです。そして、将来のために節約して、困っている仲間を助けることに余剰分を使うのです。これが、普通の農民の正しい生き方なのです。

人道は水車

また先生は、「人道は、天道に逆らうべきか、従うべきか？」という天道と人道の区別について問うとき、ここで有名な先生の「水車の譬え」が出てきます。「落ち葉掃き」と同じく、これも優れた譬えであり、名言です。

人道は中庸を尊ぶ 人道は、譬えれば水車のようなものである。その形の半分は水流に従い、半分は水流に逆らって輪が回る。全体が水中に入れば廻らないで流される。また水を離れれば廻るはずがない。仏教でいう「高德」といわれる人のごとくに世を離れ欲を捨てた者は、たとえてみれば水車が水を離れたようなものであり、また凡俗の人たちが教義も開かず義務も知らず「私欲」一つに執着するのは、水車全体を水中に沈めたようなもので、**いずれも社会の用をしない。それゆえ人道は中庸を尊ぶ**のである。水車の中庸は、ほどよく水中に入って、半分は水に従い、半分は水流に逆らって運転がとどこおらないことである。人の道もそのように天理に従って種を蒔き、天理に逆らって草を取り、欲に従って家業を励み、欲を制して義務を思うべきである。【『二宮翁夜話』4頁】

中庸は高度な概念 ここで、「中庸」というむづかしい言葉が出てきました。儒教では、よく出てくる言葉です。「過不足なく、偏りのない心構え」のことです。この難しい心構えについて、先生は諄々(じゅんじゅん:よくわかるように繰り返して説き聞かせる)と説きます。この「儒教」で有名な格率(行為の規則・論理の原則などを簡単に言い表したもの)である「中庸」は、本来、とても難しい言葉です。ものの本には、「どちらにも片寄らないで常に変わらないこと」「過不足がなく調和がとれていること」などと書かれていて、孔子でさえ「中庸の徳たるや、それ至れる(出来る)かな」と嘆いているように、「中庸は、修得者が少ない高度な概念である」とさえ言われています。それを先生は、さっさと、水車の譬えとして簡単に解いて見せます。「中庸とは、半分は水流(天道)に逆らい、半分は水流に従うこと」というのです。そして、「特に天理にかかずらわって、運転がとどこおらないようにすること」として、「常に、農作業の務めを怠らないこと」と注意しています。見事です。これも、「報徳仕法」です。

さらに、先生は、「中庸」[中]について独自の解釈をしています。そして、先生の十八番(おはこ)の「分限」と「推譲」(すいじょう)についても論じています。

「中」なれば正しい 門人が言う — 「どうか満の字の説と満を持する法をお聞かせ願えませんか」と。

尊徳翁は言う — 「いったい世の中で、何を押えて満と言えよいか。百石を満といえ、五百石・八百石があり、千石を満といえ五千石・七千石があり、万石を満といえ五十万石・百万石がある。だからどのくらいを押えて満と定められようか。これが世人のまどうところだ。およそ書物にあるところは、みなこのように言うべくして実際には行こなわないがたいことばかりだ。だから私は人に教えるのに、百石の者は五十石、千石の者は五百石、**すべてその半分で生活を立て、その半ばは譲るがよい**と教える。分限によって、その中とするところがそれぞれ異なるからだ。『これ允(まこと)にその中(ちゅう)を執れ』というのに基づいているのだ。こうならば、一つ一つが明白で、迷いがなく疑いがない。このように教えなければ用に立たないのだ。私の教えでは、これを推譲(すいじょう)の道という。すなわち **人道の最高道德だ**。『ここに中(ちゅう)なれば正し』というのになっている。そして、この推譲に順序がある。今年の物を来年に譲るのも譲だ。すなわち貯蓄をいう。子孫に譲るのも譲だ。すなわち家産増殖をいう。その他、親類にも朋友にも譲らなければならず、村里にも譲らなければならず、国家にも譲らなければならない。資産ある者はしっかりと分度を定め、法を立ててよく譲るべきだ」

【『二宮翁夜話』80頁】

速やかに、村全体が「中」の富者になるためには、「すでに富者になっているものが、まだ貧しき者たちに富みを推譲して助けてやることだ」というのです。村では、村人同士がお互いに助け合う「推譲」が大事なのです。

翁はまたこう言われた — 「世間の人は、口では貧富・驕儉(きょうけん:必要以上に贅沢をすることと無駄遣いをしないこと)と言うが、**なにを貧といい、何を富というか**、それ明瞭ではない。天下には、もとより大も限りがなければ、小も限りがない。十石の者を貧といえ無碌の者があり、十石を富といえ百石の者がある。百石を貧といえ五十石の者があり、百石を富といえ千石も万石の者もある。千石を大と思えば、世間の人は小旗本という。万石を大と思えば、世人は小大名という」。

「さらば何をもとに貧富・大小を論じよう。たとえば売買のごときだ。物と価とを比べてこそ安値と高値とを論ずることもできるが、物だけでは高下を言うことは出来ない。価(あたひ)のみでもまた高下を論ずることができないのと同じだ。これは世人が間違えるところだから、いま、これを明瞭に言おう。千石の村で戸数が百戸ならば、一戸十石にあたる。これは自然の数である。これは、貧でも富でもなく、大でも小でもなく、どちらにもかたよらず中(ちゅう)と言える」。

「この『中』に足りないのを『貧』といい、この『中』を越えるのを『富』という。この十石の家が**九石で暮らすのを『儉』**といい、**十一石で暮らすのを『驕奢』**(きょうしゃ)という。それゆえ私は常に言っているのだ — 中は増減の源、大小二つの名の生ずるところだ、と。だから、貧富は一村々々の石高の平均度をもって定め、驕儉は一人々々の分限をもって論ずべきだ。その分限によっては、朝夕うまい料理を食べ美しい着物を着、豪華な邸宅に住んでも奢りではない。分限によっては米飯も奢りであり、茶も煙草も奢りだ。みだりに驕儉を論じてはならない」。

「貧と富の違いは、予算を立ててその分度内で暮らすかどうかだけのことだ」と先生はいます。贅沢か、儉約かも、それで決まります。絶対的な数値はありません。また、村の中で貧者と富者との違いは、これは村の石高で決まります。村の石高の「平均」以上の家を「富」といい、平均以下を「貧」といいます。これも、他村と比べての絶対的な数字で決まるものではありません。その村内だけの「貧×富」「貧者×富者」の比較です。でも、

それでいいのです。その村と村人が、富者として独立して存在出来れば良いのです。

なぜ、村の貧富の平均を取るのか？

でも、私たちは、それでは満足できません。絶対的な貧村もあれば、羨ましい富村もあります。貧しい村はいつまで経っても貧しいままです。それでいいのでしょうか？ 村の貧富の平均を、なんのためにとるのでしょうか？ 無意味なように思われます。

先生は更につづけます。ここが大事なところです —

「さて村里の人気を一新し、風俗を一洗するということは、はなはだ困難なことだが、誠心をもってして、その方法を得ればさほど難事ではない。まず、衰貧を挽回し、頽廃を復興することから着手して、次第に人気や風儀を改善すべきだ。さてその人気・風儀を一新するのに機会がある。
【『二宮翁夜話』三十九話 39頁】

たとえば、ここに戸数百戸の村がある。そのうち四十戸は衣食に不足がなく、六十戸が窮乏していれば、①その一村は貧しいことを恥としない。貧しいのを恥としなければ、②租税を納めないのを恥とせず、③借財を返さないのを恥とせず、④夫役を怠るのを恥じず、⑤質を入れるのを恥じず、⑥暴言を吐くのを恥じない。

さあ、大変です。貧しいのを恥としない人間は恐ろしいです。これ以上落ちようがないので、好き勝手に出来ます。なにをやるにも自由自在で、周りの人は、そのとばっちりを受けて大迷惑です。村の秩序と結束と「仁の精神」が次第に崩れていきます。恥を知らない人たちを善に導く、なにかとっかかりが必要です。

「こうなると、上の法令も名主の命令も行なわれない。法令が行なわれなければ悪行の仕放題である。これをどうして導こうか。こうなっては **法令も教諭もみな益のないものだ**」。

また百戸のうち、六十戸は衣食に不足がなく四十戸は貧窮しているときは、①教えなくてもおのずから恥を知る。②恥を知れば義心が生じ、義心が生じれば、③租税を納めないのを恥じ、④借財を返さないのを恥じ、⑤夫役を怠るのを恥じ、⑥質を入れるのを恥じ、⑦暴言をはくのを恥じる。

「こうなれば法令も行なわれ、教導も行なわれ、善道に導くこともでき、勉強にも向かわせることができる。機会というのはこのようなものだ」。

機会を狙う 先生は、ただでは起きません。機会を狙います。まず、「貧×富」と「貧者×富者」の比率を確かなものにしようとします。村の中で富者の比率を六割以上にすれば勝ったも同じです。村は富者で満ち、農民も自ずからよく働くようになり、ますます富者が増えるというのです。これが、報徳仕様というものです。先生は、焦ったりしません。一人でも多く、「中」になるように指導します。

「たとえば秤(はかり)の釣り合いのようなものだ。左が重ければ左に傾き、右が重ければ右に傾くように、村内に貧者が多いときは貧に傾き、悪が多いときは悪に傾く。ゆえに、

ともに恥がない。富者が多いときには富に傾き、善が多いときには善に傾く。ゆえに恥を生じ、恥を生ずれば義心を生ずる。**悪い風俗を一洗して一村を復興する事業はこの機をとらえるにある。**これを知らなくてはいけない」。

なるほど。村の平均を知ることが必要なのは、村の復興の勢いを促(うなが)して、六割の富者を獲得するためです。でも、それはそうとして、大事なことは村人たちをこのように平均以上の金持ちの富者に出来ない場合はどうすればいいのでしょうか？ 先生はそのことについても助言を忘れません。

どんな良法・仁術といっても、村中に一戸も貧者がないようにするのはむづかしい。なぜなら、①人に勤勉・怠惰があり、②強・弱があり、③智・愚があり、④家に積善もあれば不積善もあり、⑤加えて前世の宿縁もあり、これをどうすることもできないからだ。こういう貧者は、ただその時々不足を補って、どん底に落ちないようにしてやることだ。

ここでも、報徳先生は、「人には色々あるので、どうにも出来ない場合がある」と、一度は諦めて、でもまた、「それを助けるように常に気を使っておくことだ」といいます。これは、一時の「便法」、すなわち、先生の言う「変通」であり、「権道」です。先生は、最終的には、決して諦めません。必ず、機会を見つめます。村民の財産の平均を出すのも、単なる統計作りの為ではなく、貧者を探して見つけ出し、それを助けて富者にするためです。記録作りや貧者を見放すためではありません。すべて、「勤勉と怠惰」「強と弱」「智と愚」「積善と不積善」などをデカップリングするためです。「仁」の心は、人間好きなのです。

【2025/04/10 都築正道】